

就職支援にワークショップ(WS)を導入する試み

小 崎 恭 弘

昨年度は授業においてWSを導入した。そのときの実践を生かし、今年度は就職支援に対してはじめてWSを行った。

昨今の学生に対する就職支援は、大変厳しいものになりつつある。社会状況の大きな変化と、それを取り巻く就職関係各所の変化があり、就職という概念が学生も含めて多様化している。そのような場では一斉に同一の就職支援では、対応することができなくなっている。そのような背景の中で、学生一人一人が自分自身の就職に対して、真摯に向き合い前向きに対応していく姿勢が求められる。そのために外的な刺激による就職への意欲を持たすのではなく、自己への気づきという内的な動機による積極的かつ、自立した意欲を持ってもらうことが必要になる。そのために今回のWSを行い学生の就職支援へとつなげた。

参加意義に関しては全員が参加の意義を認めており、そしてスキルの向上感においても、87%の学生が何かしらの向上感を得ている。これらにはいくつかの要因が考えられる。

- ①初めての体験で新鮮であった
- ②WSのもつ特性が十分に発揮された
- ③時期や内容が学生のニーズと合致した
- ④実体験を伴い、自己の表現の場として適切であった

これらの要因がそれぞれに結びつき、今回の結果につながったと考える。換言すれば、これまで学生はコミュニケーションについての理解や体験の場もなく、同時に自己についての認知や理解も不十分であったといえる。今更述べる必要もないが、就職活動はやはり自己の見つめなおしと、自分の思いや夢などをきちんと理解し、加味した上で行っていくものである。その第一歩はやはり自己認識であるが、それさえもできていない、あるいは理解していないということが現状である。今回のWSはあらためてその現実を感じる結果になった。

就職活動や就職は学生にとって大変大きな試練である。しかし決してそのこと自体はゴールでもなければ、人生の全てでもない。大切なことは、それらの過程においてどれほど人間的な成長ができ、良き市民として成熟していくかあるいはその素養を身につけるかということである。そのような視点に立脚すると、就職支援はただ単に就職させるという単純なものではない。就職支援は就職活動と就職を通じて、学生一人ひとりがいかに自分の人生と関わろうとし、また実際に関わっていくことができるのかを支える活動といえる。今回はその支援の実践としてWSを導入した。直後のアンケートからは、意識の変革とコミュニケーションスキルの向上という効果が得られた。しかしこのような一実践で就職支援の全てを総括し評価することは、無意味なことである。このような意義のある試みを通じて、もちろん授業や学内外活動など学生生活の多くを含めて、トータルな形で就職支援の構築を目指さなくてはならない。

今回新たな試みとしてWSを導入した。もちろんWSが万能というわけでもなければ、全ての状況や学生に対して有効であるというものでもない。今後の就職支援の大きな柱になりえるとは考えるが、全てを網羅できるものでもない。今後の課題としては、WSにおける様々なワークの取り組みと開発を行い、それぞれの状況やニーズに合わせた形で活用が挙げられる。また今回は意識の向上感という、本人の意識においての結果が得られたに過ぎない。このWSの実際の効果を今後どのように、査定し検証するかも大きな課題であるといえる。それと同時に就職支援の他のプログラムとの、整合性やそれらのバランスなども、検討しなくてはならない。さらに、WSのファシリテーターとしての人材の育成とWS自体の研究も行う必要がある。WSが有意義であればあるほど、高いレベルでの実践と活用を目指すべきであり、そのことが最終的に学生の養成と就職支援に大きく貢献するのである。